

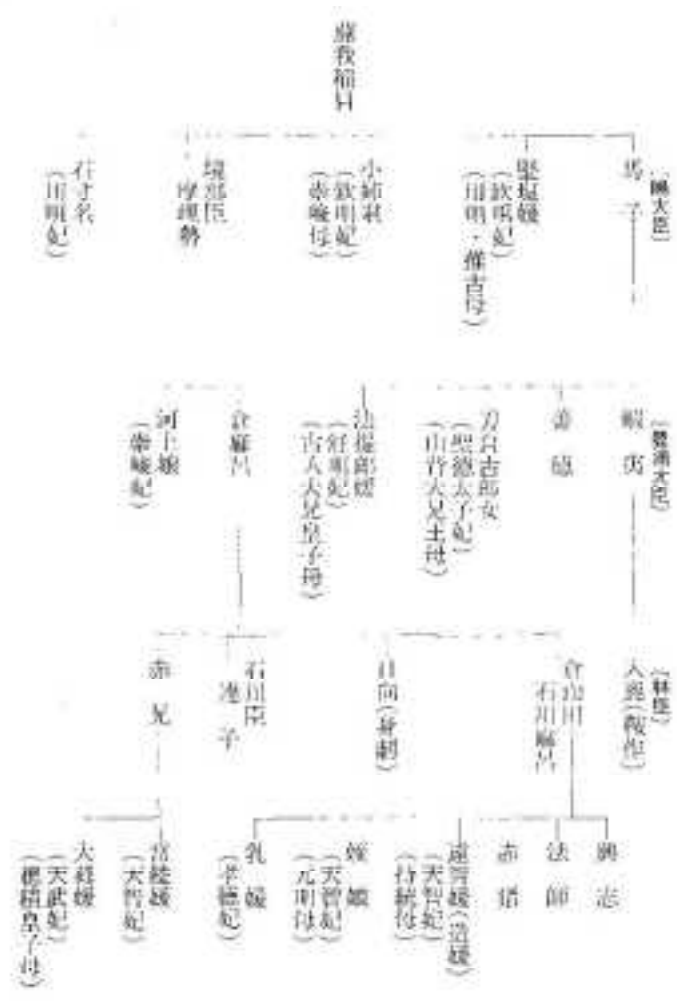
蝦夷・入鹿の専権と乙巳の変

そのころ豊浦大臣とよばれた蘇我蝦夷は歌傍の家にも住んでいたらしいが、ますます専権の勢いを強めてい

た。蝦夷は、さきに馬子が蘇我氏の本居だといって私有を求め、推古天皇に拒否された葛城県の高宮（舞原市森島付近）の地に祖先を祭る廟を建て、八僧舞を舞わせた。八僧舞は八人ずつ八列に並んで舞う舞臺で、中国では天子の舞とされていた。また多くの人々を徴発して今来に雙葉を作り、一つを蝦夷のための墓として大陵と称し、他を子息の入鹿のためのものとして小陵といった。陵といえは天皇陵にのみ使われた言葉であるが、また上宮王、すなわち聖德太子家の私有氏である乳部を自分の墓所で使役するというような専横も多くなった。そして皇極二年十月、蝦夷は病牀に臥すと、ひそかに紫冠を人面にて与えて大臣を代行させた。入鹿はそこでかねての計画を実行に移した。それは懸案の皇位継承問題に因りて、馬子の娘法提那女の生んだ吉人大兄皇子を次の天皇に擁立するため、その障害となる上宮王家の中心山背大兄王を殺害することである。入鹿の派遣した軍兵に斑鳩宮を襲われた山背大兄王はひとたびは生駒山に難を避けたが、あえて斑鳩寺に還り、子弟妃妾らとともに一族ごとくみずから首をくくって果てたという。上宮王家を滅ぼした蝦夷・入鹿の専制はいよいよその極に達した。御池にまたも一茎二花の蓮が見つかったと喜び、蘇我氏隆盛の瑞兆であるとして、それを金泥で描いて飛鳥寺の丈六像に献じたり、また甘藷園に家を並べ建て、蝦夷の家を上宮門、入鹿の家を谷宮門と名づけ、さらに自分たちの子供を王子と呼ばせた。宮門といふ王子といい、すでにみずからの身を皇室になぞらえているのである。

しかしこうした蝦夷・入鹿の専制がつのればつものだけ、人々の反感もまたしだいに強くなって行った。蝦夷らがそれを察知しないはずはなく、一方ではまた身辺の警戒を厳にしはじめた。甘藷園の家の外には城柵を作り、門の傍には兵庫を設け、各門には水槽一つと木鉤数十を置いて焼打ちに備え、精強の兵が武器をもって家の警戒に当たった。また歌傍山の東の家には水をたたえた堀をめぐらし、兵庫には箭を集めた。そしてつねに五〇人の精兵に護衛させて、この親衛隊を「東方の鎮衛者」と名づけ、また蘇我家に出入りして仕える諸氏の氏は

蘇我氏系圖



親族のごとくに扱い、その離反を助ごうとした。ことに倭漢直の一族は古くからの結びつきに従って護衛の主力となっていた。こうした情勢のなかで中大兄皇子と中臣連鎌足、すなわち鎌足とは、あるいは島にある馬子の旧邸——そこには入鹿が住んでいたであろうか——に近い宮殿の中で、あるいは南淵請安のもとに儒学の教えを受けに赴く途中で、密かに蝦夷・入鹿打倒の秘策を練った。そのころささやかれた謡歌の一つ

遙々トヨトヨに一言ぞ聞ゆる 島の藪原

は、島大臣の家に近い宮殿で中大兄皇子と鎌足が密談を重ねていることを示唆したというが、何となくただならぬ空気が飛鳥の地にもただよいはじめていたらしい。

中大兄皇子と藤原鎌足は、まず蘇我の一族で、馬子の孫に当たる蘇我倉山田石川麻呂を、その娘を中大兄皇子の妃に迎えるという方策によって、与党に引き入れ、さらに佐伯連子麻呂と葛城稚犬養連網田を鎌足の推薦によって同志とした。そして皇極四年六月十二日、三韓が調物を進める日、飛鳥板蓋宮大極殿において、石川麻呂が上表文を読む機会を捉え、子麻呂と網田の二人が突如躍り出て驚く入鹿に斬りかかり、中大兄皇子は天皇の前で、上宮王家を滅ぼし皇位を傾けんとする入鹿の罪状を述べて、ついに入鹿の生命を絶った。

入鹿・蝦夷に推されていた古人大兄皇子は、これを見るや私邸に走り入り、門を閉じたまま心痛のあまり寝込んでしまった。中大兄皇子らは直ちに飛鳥寺に入ってここを本拠とし、蝦夷らの動きに備えた。入鹿の屍は蝦夷のもとに送られ、倭漢直らは武装し、蝦夷を助けて闘いを起こそうとしたが、中大兄皇子方の説得によって蘇我氏と同族高向臣国押や倭漢直らも戦意を失って散り散りになってしまったため、蝦夷らは支援をなくしてついに跡に伏した。板蓋宮・飛鳥寺・甘藷岡、そしてあるいは歌傍山の麓に展開された中大兄皇子らによる反蝦夷・入鹿のクーデター、すなわち乙巳の変を日本書紀などはほぼ以上のように記している。